



増田明美さん プロフィール

1964年、千葉県生まれ。1984年のロス五輪に出場。1992年に引退するまでの13年間に日本最高記録12回、世界最高記録2回更新という記録を残す。現在はスポーツジャーナリストとして活躍中。2008年10月よりプラン・ジャパンの評議員。大阪芸術大学教授。日本障がい者スポーツ協会評議員

●トーゴでのひとコマ
カダンバラ村で、子どもたちといっしょに走った。用意されたコースは約3km。スタートラインに並んだ子どもたちはサッカーのユニフォーム姿が多い。しかし、足元に目をやるとサンダル履きが大勢いた。ところが、そのサンダル履きの子どもたちが私の前を軽やかに走っていく。身体能力はかなり高い。

公益財団法人プラン・ジャパン

〒154-8545 東京都世田谷区三軒茶屋2-11-22
サンタワーズセンタービル11階
TEL 03-5481-0030 hello@plan-japan.org
www.plan-japan.org

子どもと築く、未来のしくみ



～トーゴの人々の支えあうチカラ～

Solidarity

増田明美

子どもと築く、未来のしくみ



プロローグ ～世界で最も貧しい国のひとつ～

「ドコドコンドコ、ドコドコンドコ」。この太鼓のリズムは馴染みがないはずなのに、なぜか心が揺さぶられる。やはりアフリカは人類発祥の地で、「遠い遠い私の先祖もここで生きていたのかも?」と思いながら歓迎の踊りに手拍子を打っていた。

2014年7月中旬、アフリカ中西部のトーゴを訪れた。過去には奴隷海岸と呼ばれたベナン湾に面し、国土は南北に細長い。国民一人あたりの所得は年間約5万円で西隣のガーナの3分の1という世界最貧国の一つだ。

貧しい国では特に女の子が劣悪な状況に置かれる。教育を受けられなかったり、早過ぎる結婚を強いられたり。人身売買のターゲットにもなってしまう。しかし、トーゴでは女の子の人権問題を解決して社会進出を促すために、女子サッカーチームが村ごとに作られているという話を聞いた。スポーツの力を信じている私は、ぜひこの目で見てみたい衝動に駆られて、遠いこの国にやってきた。

パリ経由で海沿いの首都、ロメへ。そこから北へ車で6時間、国のほぼ中央に位置するソコデという町に着いた。ここを拠点に周辺の村々を訪ねる旅が始まった。



サッカーが女の子に“自信”と“存在感”をもたらす

雑草を刈っただけの原っぱのようなグラウンドは、ゴールラインの1メートル後ろがトウモロコシ畑で、時おり、鶏の親子が横切っている。そんなのどかさとは対照的に、会場には老若男女約400人が集まり、太鼓を鳴らして踊りながら試合開始を待っていた。

ソコデを中心に、サッカーを通じて女の子の社会参加を進める活動が積極的に行われていて、2008年から農村部で12歳～18歳を対象に20チームが作られた。選手だけではなく、会場で実況する女の子のレポーターや審判も育てている。

活動を始めた当初は、保守的な親や村の長老の反対が強く、なかなかチームを結成できなかったそうだ。しかしプラン・トーゴの地道な働きかけもあり、今では長老や村の男性が遠くの試合にも応援に駆けつけている。

この日は地元カッセナ村のチームと近くのチャンバ村のチームとの親善試合が行われた。両チームともに全国優勝した経験を持つ。サッカー場に現れたユニフォーム姿の彼女たちは短髪で背が高く体が引き締まっていて、たたずまいからしてカッコいい。試合が始まると太鼓の音は一段と勢いを増し、ボールがゴールに迫るたびに歓声が大地に響いた。





ハーフタイムになると、試合を実況していた女性と控え選手による寸劇が始まった。人身売買に遭わないためにも女の子の教育が必要だということを訴える内容だった。重要なメッセージをユーモアたっぷりに伝えるので、子どもたちも真剣な眼差しで聴いていた。こんな風で大勢の観客が集まる機会を利用して、選手やレポーターは日頃から啓発活動を行っている。

試合はPK戦の末、地元のカッセナが勝利し、フィールド内に観客がなだれ込んで皆が踊りだした。いちばん感動したのは、がんばる女性を男性が自然に応援している姿。

試合後、両チームの選手たちに話を聞いた。サッカーをして何か変わった？

すると「大きな声で話せるようになった」「親が私の意見を聞いてくれるようになった」「自分に自信が持てた」という言葉が返ってきた。「将来はジャーナリストになりたい」と話す少女の目が輝いていた。

私が想像していた以上に、サッカーは選手や村人たちの心を動かしていた。



障がいのある子どもたち、そして支える人たち

先に、スポーツの力を信じていると書いたが、私はパラリンピックなどで目の当たりにする、障がいのある人々の力をも信じている。プラン・トーゴは障がいのある子どもを地域ぐるみで支えるための活動も行っていると聞いた私は、グラウンドを後にして、障がいのある子どもたちがいる家庭を訪問した。

カダンバラ村に暮らす、ろうあ者のリシャラさん。職業訓練を受け、美容師を目指している。青いブラウス姿でとてもオシャレな17歳だ。「美容師の先生との出会いで娘も生きる意欲をもつようになりました」と母親が話す姿が印象的だった。確かに赤ちゃんを抱っこしながら話す先生は立ち居振る舞いなど洗練されていて魅力的な女性である。リシャラさんに妹を見つめるような優しい眼差しをむける先生。リシャラさんが先生のようになりたいと、美容師としても、女性としても憧れているのが分かる。プランのスタッフだけではなく、村人が身近なところで支え合っていた。



村にある「障がいのある子どものための施設」に通う男の子と

「ここパソワデ村は山間部で農地が少なく、この近辺で一番貧しい村です」と現地のスタッフから説明を受けた。近い親戚同士の結婚が多く、保健医療サービスも充実していないため、障がいのある子どもが多く生まれてくるそうだ。

村には保健所がひとつあり、そこには蛍光灯も冷蔵庫も設置されていたが、電気が通っていなかった。「冷蔵庫を使えるようになればワクチンや血清などが常備できる。毒ヘビにかまれてもすぐに対処できますが、今はバイクで街の病院まで40分かかる。助かる命も助けられません」と所長さんが話すのを切ない思いで聞いた。しかし、希望もある。近く、この村に電気を通すための電柱が着々と建てられていたからだ。

村の小学校の校庭にある大きな木の下。日曜日だったその日は、プランのトレーニングを受けた村のボランティアが白い布にイラストが描かれた厚紙を貼りながら、障がいについての啓発活動を村の人々に行っていた。

「障がいの種類にはどんなものがありますか？」。

村人から多くの手が上がり、「目が見えない」「歩けない」など答えが出ると、その障がいのイラストが描かれた紙を皆に見せながら白い布に貼っていく。

「障がいがあるからといって、子どもを家に隠してはダメです。障がいがあっても仕事はできます」と、美容師や修理工などの職業訓練のイラストも貼り出して説明。おばあちゃんに抱っこされて聞く子どもや大人たちの目も真剣そのもので、啓発活動の原点をみる思いがした。





この村でも2軒の家庭を訪問。生まれつき脚に障がいがあった5歳の男の子、アラザさんは、村のボランティアの女性による継続的なマッサージと指導のもと線の上を歩く練習を続け、今では自分で歩けるようになっている。サッカーのユニフォームを着て、「将来はサッカー選手になりたい」と目を輝かせた。

同じく5歳の男の子、ラムダンさんはろうあ者でおばあちゃんに育てられている。「お母さんは再婚して他家に嫁ぎ、他のきょうだいは連れて行ったが、障がいのあるラムダンだけを置いていった」という。悲しみを宿した目で、ニコリともしないラムダンさん。しかし私たちが席を立ち、5～6人の友だちが周りにやってくると笑顔がこぼれた。普段からいっしょに遊んでいるからこそその自然な笑顔に、少し安心した。



友だちに囲まれて笑顔を見せるラムダンさん(中央)

エピローグ ～寄り添って、生きていく～

カダンバラ村とパツワデ村、2つの村を訪ねて正直驚いた。日本でもまだ障がいのある人を支える環境や人々の意識は十分ではない。でもトーゴの貧しい村で、障がいのある子どもを家の中に閉じ込めてはいけなく、一人ぼっちにさせてはいけなく、地域の人々が子どもたちに寄り添いながら暮らしている。

プランが建てた校舎の前の大きな木の下では、「母親の会」「父親の会」「子どもの会」に分かれて会合が開かれ、プランの指導を受けたボランティアが啓発活動を行ったり、村人同士で障がいのある子どもをどのようにして支えられるかを話し合ったりしていた。

「もっと障がいのある子どもを助け出したい」と熱く語る義足の青年にも出会った。

カッセナ村では、サッカーを通じて前進しようとする女の子たちを、村全体で応援していた。女の子が注目されることも意見をきかれることもなかったこの地域で、周囲からの応援がどれほど女の子たちを励ましていることか、想像に難くない。

プランが地道に行ってきた活動が、この赤土の村々に根づいている。

